

読みを深めるために

— 一つの試み、感想のメモを使って —

神 田 和 正

もくじ

- 一 はじめに
- 二 感想をメモさせる
一、二、三、四、五、
- 三 感想のメモを使って
一、二、三、四、
- 四 反省と今後の問題
- 五 わりに

はじめに

十月の下旬になると例年のごとく読書週間が始まる。この週間を中心にして、本を読むことや、読書の感想文を書くことが奨励される。こうした時に、いつもつぎのようなことを考えさせられるのである。

◎本を読め読めと奨励はするが、子どもたちは、本をどのように選
び、どのように読んでいるのであろうか。

◎感想文を書け書けというが、子どもたちは感想文をどのように書
いているのであろうか。

これらの点をはっきりしなければならないのではないかと思うの
である。こうした点をしっかりと押えて指導者は指導に当たらな
ければならない。これらの中に含まれる指導部面としては、読書指
導、読解指導、作文指導がある。

子どもに読書を勧める指導者の腹の中には「知識を広め、心情を
豊かにする。」「読みの技術を高める。」「本の選択力をつけ
る。」などの目標あつてのことと思うが、ここで考えなければなら
ないことではないであらうか。

◎子ども本の選択力をどれだけつけているであらうか。

◎子どもの読み取る力をどれだけつけているであらうか。

◎子どもの感想を書く力をどれだけつけているであらうか。

ということである。

世はコンクールばかり、読書の感想文がいろいろな所で募集され、それが発表されている。発表されたものは実にすばらしいものであるし、これはこれなりに意義のあることである。しかし、その現われたものは山に例えれば山の頂上に過ぎない。頂上の下にあるもの、多くの子どもたちの感想文に目を向けなければならぬ。感想文にまで到達させる自己の指導を振り返って見る必要はないであろうか。

感想文というと、我々はすぐ完成されたものを子どもたちに要求していいであろうか。一年から六年までを十把ひとからげにし、同じような感想文を要求しているのではなからうか。そこには、大きな飛躍がないであろうか。ここに感想文にまで到達する過程を押える必要を痛感するものである。すなわち、読みを深める指導、自分の感想を深める指導、それをメモする指導、そして、これらを土台として、感想文を構成していく指導と一連の指導過程が必要である。

最近、読みを深めるために作文が結びつけられ、「読解と作文」という名のもとに論議されているようである。しかし、この場合、あまりに安易な結びつけが行なわれ贅かされることがある。この二つは互いに有機的に結びつき働か合うことよって、お互いが伸び、効果をあげ得るものであることは、予想されるところである。こうした所も今後充分研究されなければならぬであろう。

以上、述べて来た問題を踏まえて、私の実践した一つの試みを、以下発表したいと思う。

感想をメモさせる

つぎのような物語教材を十月十六日より十八日の間（四時限）扱った。

〔資料一〕

P 124

(さし絵)

興義が船に乗っている。
そして、魚をにがしている。

魚になつた人

——これは、今から二百年ほど前、上田秋成（うへだあきなり）という人の書いた「雨月物語（うげつものがたり）」の中にある話です。——

びわ湖の岸の寺に、興義（こうぎ）というぼうさんがいた。興義は、ひま

えあれば、小船に乗って、びわ湖に出た。そして、漁師たちから、生きている魚をゆずり受けた。

「これからは、決して漁師につかまらないように、気をつけるのだぞ。」

興義は、まるで人に話しかけるように言いきかせては、ゆずり受けた魚を、湖ににがしてやった。

あるとき、興義は病気になった。そして、でしたちの心づくしのかんごのいかにもなく、ねこんでから七日目に、ついに息がたえた。

しかし、息はたえたけれども、興義のからだのあたたかみは、あくる日になっても、そのあくる日になっても、消えなかった。でしたちは、万一を願って、仏に、おいのりのお経をあげ続けた。

三日目に、興義は、「ううん。」と大きなうなり声をあ

げて、息をふき返し、目を開いた。そして、おどろき喜ぶでしちに言った。

「だれか、すぐ、平の助（たいらのすけ）どのの家へ行ってくれ。もし平の助どのの家で、コイを殺そうとしていたら、殺すのを見合わせて、平の助どのに、すぐ、寺に来てくれ、と言ってもらいたい。」

でしちは、ふしぎに思ったが、さっそく、ひとりの者を、平の助の家に行かせた。使いの者が行ってみると、なるほど、興義のことばどおり、平の助の家では、一びきの大きなコイをまな板の上のせていた。ざしきには、家族や親類の者たちが集まって、酒もりをしていた。使いの者のことばを聞いた平の助は、コイをまな板からたらいに移させ、ほかの人たちと、いっしょに、寺にかけつけた。

興義は、平の助をはじめ、その一族や、でしちを見まわして、次のように話をした。

わたしは、いつのまにか、びわ湖の岸に行っていた。よく晴れた日であった。ひどく、からだが熱くなってきたので、衣をぬいで水に、はいった。

しばらく水につかっていたら、どこからか、りっぱな身なりの人が魚に乗ってきて、わたしに言った。

「あなたは、いつも魚を助けてくれます。その礼に、この衣をあげましょう。これを着ていれば、コイのすがたに変わって、思いのままに泳ぎ回ることができるのです。けれども決

して、つりばりのえさを食べてはいけません。」

その人は、そう言うと、わたしに、コイのうろこでおおわれた衣をくれて、どこかへ去っていった。

わたしは、もらった衣を着てみた。するとなるほど、わたしのからだはコイのすがたに変わり、思いのままに泳ぐことができるようになった。うれしくなって、時のたつのもわずれ、びわ湖の中を、あちらの岸、こちらの島と泳ぎ回った。なんと、たとえようのない、いい気持ちであった。さまざま、か魚たちも、わたしを友だちと思つてか、行きあうと、みんな、うれしそうに、ひれをふつた。

そのうちに、わたしは、おなががすいてきた。何か、食べ物がないだろうか、えさを求めながら泳いでいると、船に出あった。船に乗っているのは、漁師の文四（ぶんし）であった。文四は、船から、つり糸をたれていた。つり糸の先に付いている、えさは、なんとも、おいしそうであった。

えさを食べるな、と言われたことを、わすれていたのではなかった。けれども、文四なら、わたしと親しい間がらだ。わたしと、わかったら、助けてくれるに決まっている。そう考えたので、わたしは、そのえさに、とびついた。そして、船に、つり上げられた。

ところが、船につりあげられてから、わたしが、いくら話

(さし絵)

りっぱな身なりの人が衣を手に持ち、魚に乗って来る。

しかけても、文四は見向きもしてくれない。文四は、そのまま船を岸に返し、わたしをかごに入れ、平の助どのの家に持って行って、買ってもらった。

(さし絵)
興義が平の助やでしたちに話をしている。

平の助どのの家の人は、わたしをかごのまま庭先へ持っていき、ざしきにいる平の助どのに見せるために、わたしをつかんで かごから出した。

平の助どののは、わたしを見て、「みごとなコイだ。さぞ、おいしがるう。」と言った。わたしは、「興義だよ、興義だよ。」と、何度も言っただけども、平の助どのも、ほかの人たちも、知らぬ顔をしていた。

わたしは、今度は思いきり、からだをふり動かした。すると、わたしは、両方の目を、強くおさえつけられた。わたしは、今助けてもらわなければ殺されると思ったので、全身の力をふりしぼって、「助けてくれ。」ときけんだ。すると、はっと目がさめた。目がさめてみると、ここに、こうしてねているのであった。

興義の話聞いた平の助は、すぐに、わが家に使いを走らせ、合所のコイを、びわ湖に、はなさせた。

この話をつたえ聞いた人々は、それは、魚が恩返しをしたのだ、と言い合った。あたりまえなら、そのまま命を落とす

ところなのだが、日ごろ魚を助けているので、今度は魚が興義を助けたのだ、とうわさし合った。

興義は、生き返ったあと、たいそう長生きをした。興義は、ありありと目にうかぶ、あの、水中の魚のすがたを、しばしば絵にかいた。そして、ついに、魚の絵にかけては、どんな画家もおよばないほどの名人になった。

興義が死んだあと、そのゆいごんによって、でしたちは、興義のかき残した魚の絵を、みんなびわ湖の水にうかべた。すると、画中の魚は、紙からぬけ出て、泳いでいったということである。

(日書版小学国語五年の一 単元「むかしの本」一二四ページ一 三ページ)

この教材を指導するに当たって以下のごとく考えて指導計画を立案した

△ⅠⅤ

この教材を使って何をねらうかを考えた。そして、つぎのような目標を立てた。

一、わからない文字や語句の読み方や意味を国語辞典などを使って調べることができるようにする。

二、古典に興味をもち、味わって読むことができるようにする。

三、読み物の範囲を広げ、日本の古典を選択して読むようにする。

成る(秋成) 雨湖
興(漁) 師(仏) 助(平の助)
殺す(移す) 求める
身家(恩)
(印は新出漢字 他は説)
(みかえ漢字)

四、物語の主題をとらえることができるようにする。
 五、やや複雑な文の組み立てが理解できるようにする。

これらの目標の中で、この教材を使って特に㉑と㉒の指導に重点を置くことにしたい。

△二V

このように目標は立てたが、学級の子どもの実態を眺めたとき、はたして、この目標が達成できるものであるかどうかを検討されなければならぬ。①古典への経験・興味の実態②読書の実態③各種テストによる読解力の実態などを通して子どもの実態を適確に把握する必要があろう。

①子どもは古典をどのように読んでいるであろうか。

源氏物語十四(十一)	古事記	九(七)	
日本書紀	六(三)	雨月物語	十二(九)
平家物語	十(五)	今昔物語	十三(七)
八犬伝	十七(十四)	竹取物語	二十一(二十)
太平記	二(一)	(数字は人数、()内はおもしろく読んだ人数)	

ひじょうにおおざっぱな調べであるが、だいたいの傾向はつかめる。ここに読んでいるものはすべて子どもの読み物として書き改められたものである。

②読書の傾向としては、女子は非常によく読んでいるが、男子はあまり読んでいない。四月以降図書室の本を一冊も読んでいない者が男子の中に三名もいたのには驚かされた。多く読んだ者は、四月以降七十八冊(女子)である。男子では三十四冊が一位であった。ひとりひとりをみると相当の個人差のあることが認められる。

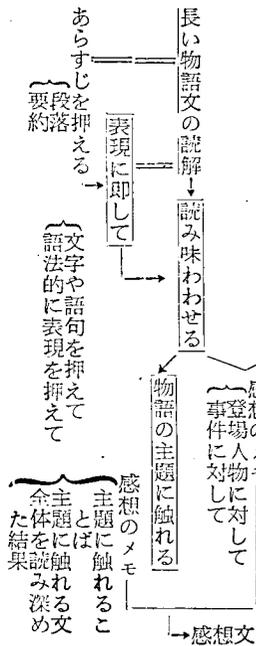
③このような物語を読む場合の子どもの実態は、興味本位で浅く読まれることが多い。あらすじをつかんだり、表現を押えて読んだりする力は劣る。こうした点をしっかりと指導しなければ主題にもせまれないのではないだろうか。

このような実態から、目標を検討し、指導の重点を決定した。この実態から、感想をメモさせること、それも、表現をしっかりと読み取った感想をメモさせることを考えたわけである。そして、この感想のメモを手がかりとして、この物語を読み味わわせ、物語の主題にまでせまらせようとしたのである。目標の所には響かなかつたがこのような活動が自然の形で読書の感想文につながっていくのではないかと考えるのである。

△三V

以上の△一Vと△二Vを考える前において、その過程において、また、後において、この物語「魚になった人」の教材そのものの研究は続けられなければならない。教材を研究し分析した結果に基づき、指導する立場に立って、指導の流れを図示すると、つぎようになるであろう。

〔資料二〕



△四V

この指導過程全体を通して、つぎのような問題が起こってくる。
指導過程中にこれらの問題を解決していきたいと思う。

一、文学作品をどのように鑑賞させたらよいか。

①読みをより深め、より定着させるための方法として、書くこと
(感想のメモ)を利用しようと思うが、どのように利用したのが効果的であるか。

②主題にせまるために書くこと(感想のメモ)を利用しようと思うが、どのように利用したら効果的であるか。

③学級全体の子どもを学習に参加させ、学習を徹底させるために、小グループによる学習形態を取り入れたいと思う。そのグループ学習をどこでどのように活用すればよいか。(ここではこれに触れることができない。)

二、読書指導をどこどのように取り入れたらよいであろうか。

三、ことは、語法の指導をどこどのように取り入れたらよいであろうか。
など

この発表では紙数の関係で(一)の問題①と②に中心を置きたいと思う。

△五V

四時限の学習は、つぎのように流した。

第一次 導入(解説)、読みの指導、新出・読みかえ漢字の指導、

(一時限)むずかしいことばの指導、素朴な感想をメモさせる。

第二次 あらすじをつかむ(段落の発見、要約)、感想をメモする。

(二時限)

第三次 感想メモを中心に興義の人がらを考える。この物語の主題(四時限)に触れる。

感想のメモを使つて

以上のような事前準備を終わり、「魚になった人」に取っ組んでいった。この四時限を全体にわたって細かに説明ができない。そこで、一番中心になる四時限の扱いのみについて発表したい。この発表や取り上げる感想のメモの中から四時限に至るまでの指導をくみ取っていただきたい。

四時限の目標はつぎのように決めた。

「興義の人がらを表現に即して読みとり、この物語の主題に触れさせる。」

この時間の過程をどのように計画し、どのように流し、どのような結果になったかを、説明しなければならぬのであるが、一括してつぎのような便法をとらせていただくことをお許しいただきたい。

〔資料三〕

「魚になった人」

昭37・10・18(木)第二校時(九・四〇―一〇・二五) 第四時限

板 書 事 項

発 問 ① 予想される発言 ●

魚になった人

読みあじわう↓感想

◎ これまでも勉強をしてきたし、きょうこれからも勉強しようとしていことは何ですか。

● 読み味わう。―― **板書**

◎ 味わった結果生まれてくるものは何ですか。

● おもしろい。おもしろくない。

◎ それらを一緒にして何と言いますか。

● 感想―― **板書**

◎ みなさんにこれまでの勉強を通して浮かんた感想をいろいろ書いてもらいましたが、その中から選んでここに出します。これを使ってきょうは、いろいろな味わい方を勉強しましょう。

△ 小黑板提出▽

◎ これを読んでごらん。

◎ これを読んで何か気がつくことがありますか。

△ グループでの話し合い▽

● 読み方が足りない。

◎ みんなの感想の中にこんなのはないかな。

△ 各自のノートした感想のメモ点検▽

◎ こんな感想があったが、これを読んで何か気がつくことはないか。

● えらいということはよくわからない。文を読めばもっと

ぼくは、興義という人みたいにえらい人になりたい。

- 1、興義が話しかけたのに、なぜ文四にわからなかったか。
- 2、興義はなぜ、平の助という人のところで、コイを殺そうとしているのを知っているか。
- 3、ぼうさんはどうしてコイを助けることにしたのかしら。

←

読み方がたりない。(小黑板事前に用意)

興義はどんな人か

1、やさしいぼうさんだ。
 2、興義というぼうさんは、魚を助けたので、とてもやさしい人だと思う。
 3、興義はやさしい人だと思う。つかまえられた魚をわざわざにがしてやったから。

魚が好き
 絵の名人
 なさけ深い

主題——全体を説んで

1、興義はいつも魚を助けていたので、病気になるって息がたえても、あたたかみはいつまでもあり、ついに生きかえったのは、へいぜいいいことをしていると、いいことがあるというのはこのことだと思ふ。
 2、いいことをすれば、のちには、きつといいことがある。
 3、興義が、どんな画家もおよばないほど有名な画家になったのも、一つは魚の恩返しがある。

◎それをわからせようと思う。

興義はどんな人か——**板書**

◎みんなの感想の中にこんなのがあった。△小黒板提出▽
 これを読んで気がつくことがありますか。

●どれも興義のやさしさについて述べている。

●3の方が一番やさしさがよく表わされている。

△1よりも2、2よりも3がよいことをわからせる。▽

◎これ以外に興義のことほわからないか。

●魚が好き

●絵の名人

●なさけ深い

板書

△これだけで終わってはならない。表現をしっかり押えることが必要であることを知らせておく。▽

◎こんな感想があります。前の感想とくらべてみて、何か気がつくことはありませんか。△小黒板提出▽
 △グループでの話し合い▽

●全体を読んで、魚と興義の関係をしっかり見ている。

●全体を読んで胸に強く残ったもの。

●全体を読んで一層深く考えたもの。

◎こんなのを主題といいます——**板書**

△主題について説明▽

◎それぞれ自分自分の主題をさがしてごらん。そしてノートに書きなさい。
 △これと同じになる子どもにも一応書かせる▽

◎発表してください。△本時のまとめ▽

これについて少し説明をし、幾らかの反省も書き加えてみたい。

△一V

指導過程をこのように書くことは、指導そのものが一層具体化されて便利である。そのために、平素私は授業前にこのような形式で書くようにしている。

この場合、授業前のものと、授業後の結果とを合わせて示せば、より授業そのものがよくわかると思うが、ここでは、その両者を組み合わせたものを出している。これは、授業の流れが具体的につかめればよいという立場に立っているためである。

△二V

この指導を通じ、その過程で具体的にねらったものはつぎの三つである。

①表現をしっかりと読み取った上で、自己の感想をはっきりつかまなければならない。

②興義の人がらを、表現されたものの中からはっきり読み取らせらる。

③主題がどんなものであるかをわからせ、自分自分の主題に触れさせる。

△三V

子どもが記録した感想のメモに一通り目を通し、それを幾つかに分類し、読みを深めるためにどのように使うかを考えた。その分け方はいろいろあるが、私はつぎのように分類した。

①登場人物に対しての感想

興義に対して

平の助・弟子・その他の人に対して

②事件（場面）に対しての感想

肯定した上で
否定した上で
（不合理性に対して）

③時代的背景に対しての感想

④主題に触れる感想

全体的な把握
部分的な把握
概念的な把握
具体的な把握

⑤読んだ上での疑問

読みの足りないための疑問
発展的な疑問

まだまだ細かく、あるいは観点を交えて分類できるのではないかと思う。こうして見ると、子どもの感想の類型は実に多種多様であることがわかる。数量的に出すことができているが、これは、まだ分類を検討する段階なので出していない。しかし、ぜひ出してみたいものである。

小黒板に板書されたものは、以上の分類にそって選ばれた一部である。

まず、読みの足りないために出た疑問を子どもの前に提出し、表現されたものをよく読まなければならないことをわからせた。そして、このように読んで、興義の人がらを読み取らせようとした。つぎに出したものは、登場人物、とくに、興義に対するものを提出した。その中でも、興義のやさしさについて書いてあるものを出した。あとの人についてはこのあとで発展的に扱った。

最後に、主題に触れた感想を提出した。これと前の感想を比較検

討させることから、主題とはどんなものであるかをわからせようとしたわけである。これに対しては、充分なもの、さまざまなものを用意したかったのであるが、子どものノートからは用意できなかった。私のほうで考えたものを用意してもよかったのではないかと思ふ。この検討をしたあとで、自分自分の主題を発見させようとしたわけである。

なお、感想のメモ最後の小黒板の(1)に出てくる文の混乱は、意図的に出したものである。前単元で学習した、「文を切る。文をつなぐ。」の復習をねらつてのことである。

△四V

この指導を終わって、特に、反省させられている点について、少し述べてみたい。

一、主題をわからせ、触れさせること。

主題をわからせ、各自の主題に触れさせようということについては、子どもの感想を読んだ時から、深まりのない結果に終わりそうだと予想はしていた。はたしてその通りであった。小黒板に書いたようなものがほとんどであった。このことについては、不満足な気持ち、もっと深める方法があつたのではないかという気持ちと、当然の結果ではないかという気持ちとが交錯し、現段階では割り切れない気持ちを持ち続けている。

①教材からは、このような主題しか出てこないのではないか。

子ども用に書き改められた本の、四種類に目を通した。その結果、教科書のものに物足りなさを感じさせられた。また、これからは、小黒板に書いたような主題しか出てこないのではないかという気もする。あっさりとは片づけられているし、肉づけの足りな

さも感じられる。

②主題に触れさせる方法はこれでよかつたか。

最後の小黒板の(2)のような感想は、あまり早く出しすぎると、子どもはそれに引っぱられ易いのではないか。もっと未分化のものを私の方で用意すべきではなかつただろうか。

もう一つ考えられることは、他の本から同じものを選んで、それをプリントし、比較して主題探しをさせたら、もっと深められたかもしれない。

③子どもは、割り切つたつかみ方をする。

現段階の子どもは、こうだからこうだとすっぱりと割り切つたつかみ方をする。これは子どもの持つ特色で、当然のことではなからうか。

④主題のつかみにくさ。

主題は、文によつてはつきり表われていることもあるし、文の中にかくれていることもある。また、全体を読み通してみないと見つかからないこともある。全体を読んだ上でじゅうぶん考えないとわからないこともある。その上に、その人その人が持つ個性により主題の受け止め方の違いが出てくることも予想される。

このようにして、主題に触れさせることに大変なむずかしさがある。

二、じゅうぶん読ませること。

もう一つは、この過程を通して、子どもに発問しながら、もっとも教科書の物語を読ませなければならなかつたということである。読んで確かめる活動を繰り返さなければならなかつた。

たとえば、興義のやさしさはほかに出ていないかとか、絵の名人はどこでわかるかとか、なさけ深さはどこにあるかとかの発問によつて、読ませ、そして、確かめさせるのである。

反省と今後の問題

この授業を終わってみて、以上述べてきたように、自分自身が反省させられることがたくさん出てきたわけであるが、なお、授業分析の過程で、授業を見ていただいた先生方よりつぎのような問題が出された。これも私にとってはじゅうぶん反省させられる問題である。

一、感想を検討させる場合（最初に提出した感想）

①三つの感想を一度に出して解決する方法

②一つずつ順番に出して解決する方法

③一つずつ順番に出して、結論を出さず、最後に結論を全体に及ぼす方法。

これらの方法のうち、どの方法がよいであろうか。

二、主題が道徳的な徳目と安易に結びつくが、はたしてこれでよいのであろうか。

三、主題のつかませ方を指導することと、主題そのものをつかませる指導とは違うのではないか。そこで、指導の方法は違ってくるのではないか。

四、グループ学習の活用の仕方は、あの場所、あのような仕方によかったであろうか。（この点ここでは説明不十分である。）

読書の感想文との結びつきについては、つぎのように考えている。

このような指導を積み上げて、読みを深め、感想を深め、それらを自由に感想のメモとして書く力をつけていくことが大事である。そして、つぎの段階では、この感想のメモをどう組み立てて人に読ませるかの技術（構想力など）や、くふう（文の形体など）を身に付けさせなければならないと思う。

おわりに

この発表は、私が本校の研究授業をするに当たって、考え実施したものをまとめたものである。この実践過程、すなわち、教材研究、授業、授業分析において、本校の先生方の大きなご援助、ご助言、ご指導をいただいた。最後になったが、ここで松永信一校長はかの先生方に厚くお礼を申し述べたい。

書きあげてみると全体を通じて、いろいろな所に分析の不足や、考えの足りない所が目立つようである。皆様のご批判をいただきます。

（本学東雲分校付属小学校教諭）